

「底が突き抜けた」時代の歩き方 528

無知が栄えたためしはない ― ライブドア事件

結局のところ、ライブドアが犯した違法行為とはなんだったのか。ライブドアは株価の上昇と、それを元手にした企業買収で急成長したが、そこに法の逸脱があったのかどうかが問われているのだ。まず問題になっているのが、03年11月に発表した自社株の百分割である。百分割を行う理由は、「株価を百分の一にすることで、多くの投資家が買いやすきたい。そして株主がライブドア・サポーターになって、ライブドアを育ててほしい」というものだったが、実際には株主に負担を強いて、会社が儲かる仕組みになっていた。その仕組みはこうだ。

一株百万円を百分割すれば、一株が一万円になって、なるほど多くの人は安く買える。ところが当時の制度では、百分割した株券が発行されるまでに50日程度かかった。つまり、この50日間は株価が1株一万円の百分の一に下がっているのに、99株が市場に出回っておらず、流通する株数も百分の一という極端な不足状態が続いている。だから、安くなった株を買おうとする投資家は株不足のために、結局高値になった株を買わざるをえなくなってしまう。それだけでなく、株不足と株を購入しようとする需給のアンバランスは株価の乱高下を招き、既存の株主にとっても棄損を招くおそれがある手法といえる。ライブドアはこれを多用して、03年5月に十分割、11月に百分割、04年5月に十分割を行って、1年間に累計で一万分割をやったのけたが、この極端な手法に対して小口株主の増加と違法ではないという理由から、金融庁からも証券取引等監視委員会からもクレームはつかなかった。

ジャーナリストの佐々木俊尚は「堀江貴文 お子様資本主義の破滅」（『文藝春秋』06・3）で、《嫌いなものは嫌い、くだらないものはくだらないと》、自分の考えていることをつねにストレートに口にする堀江氏は、《ルールに対する考え方も同様だった》と、取材から導きだす。

《「ひとつひとつの行為が法律の条文に違反していなければ、悪いことではないという考えだった。だから彼はなぜ今回の容疑事実が法律違反になるのか、今も理解できていないのではないかと思う」（ライブドア幹部社員）

言うまでもなく、法律には単なる条文だけでなく、必ず理念がある。法律の条文を上っ面で理解するだけでなく、行間から理念を読み取らなければならない。証券取引法にも、相場の操作や詐欺的行為を資本市場から排除しようという理念が背後にある。

堀江は、そうした行間を読み取る努力をいっさいしなかった。「ルール（法律）に書いてないことだったら、何をしてもいいじゃないか」というわけである。彼はルールを

あたかもゲームのように考えていた。

たしかにマネーライフを買収する過程で行われた「株式の百分割」「ファンドによる現金買収」「ライブドアによる VLMA ファンドの実質的支配」など、個々の行為は違法とは言えない。しかしそれらがパズルのように組み合わせられれば最終的に、「ライブドアは関連会社株を売却したカネを、売上に計上していた」違法行為が構成されるということに考えが及ばなかったに違いない。》

このルポには堀江氏に関する興味深く、印象的な事実も取材されている。

《実のところ、古い世代の一般的な経営者が持っているような教養は、堀江にはほとんどないと言っている》と断じ、《若手ベンチャー経営者がこぞって登場する「GQ JAPAN」という雑誌》の05年7月号の特集「誰も知らない素顔のホリエモン。」で、《堀江は「美味しんぼ」「課長島耕作」「ナニワ金融道」など、ほとんどマンガで埋め尽くされている本棚を撮らせて、恥じない》と書く。

《私も堀江にインタビューをしていて、その無邪気さに驚かされたことが何度かあった。まだ総選挙に出馬するかなり前、こんなことを言い出したことがあった。

「若い人たちの声を代弁する政治家っていないじゃないですか。たとえば2ちゃんねる管理人のひろゆきを立候補させれば、政治もすぐ変わるんじゃないですか」

ひろゆきというのは、匿名掲示板「2ちゃんねる」を主宰している西村博之のことだ。

「ひろゆきを政治家にして、じゃあ何をやらせるの？」と問い返すと、堀江は「うーん……」と答に詰まってしまった。》

彼のようなタイプの経営者が跋扈する時代背景については、こう説明する。

《90年代末以降、資本市場が整備されたことによって、秀逸なビジネスモデルと技術力があれば資金は市場からいくらでも調達できるようになり、古い社会的慣習や規範を無視して、お気楽なネット業界の中だけで取引関係を成立させることが可能になった。ゲーム的才能さえあれば、着るものはTシャツ、読むものはマンガでも、経営者としての信用にかかわることはなくなった。一点だけ突出した才能があれば、教養などは必要ない。いやむしろカネもうけには邪魔だったのかもしれない。

堀江は何とも無教養な無邪気さを持つ一方で、そうしたゲーム的経営センスはきわめて優れていた。考え方の根底には数字がすべてという経営論理があり、堀江はその論理に忠実に従ってみずからの行動をおこしていたように思える。だが、人間という数字だけでは動かない摩訶不思議な動物を理解する能力は決定的に欠落していた。

前出のライブドア幹部社員が指摘する。

「堀江社長の最大の問題は、人の気持ちを理解できないことだった。目の前の人が言っている言葉は理解するけれども、その人がどのような立場にいて何を思っているかなどについて、いっさい斟酌しなかった。だから、大きな取引をまとめて来ても、『お疲れさま』の一言もない。それで若手社員がどれだけ励みに感じるかに考えが及ばない」》

堀江氏に関する、この種の同じような証言は他にもみられる。

《この人は率直ではあるけれど、自分の考えを相手に理解してもらおうと努力しない人なのだな、と感じた。》(江川紹子)

「堀江と話していても強烈に感じるのは、この人には『他者』がないんだな、という感覚ですね。自分が楽しければそれでいい。」(ライター、井上トシユキ)

《偏差値などの点数で評価されてきた世代の者は、それを自分自身の経営に対する評価そのものであると勘違いしやすい。》(板倉雄一郎)

ここで改めて思い起こされるのは、《堀江の行動を理念がない、マネーゲームだと批判してきた人たちは、彼が本当にゲームをやっているに過ぎない、という一点を見逃してはいないか。マネーゲームは経済活動をゲームに喩えた話だが、堀江は比喻ではなく素でゲームをやっている。ただ「所詮ゲームだ」とうそぶいているのではなく、真剣にゲームをやっている。(…)堀江にとって「時価総額」でソフトバンクを抜いて一位になることはつまりは高得点者の一位になりたい、という感覚と殆ど同一ではないのか》という大塚英志の指摘(『週刊ポスト』05. 6. 3)である。ゲームの攻略法を考えていくようにして、《単にフジはクリアーされただけの話だ。だからゲームをする子供に何故ゲームをするのと聞いたところで全く話が噛み合わないように、堀江に「理念」なんて問うたところで意味はないし、却って「理念」のあるゲーマーの方がはるかにうさん臭い、ともふと思う。》

この大塚英志の指摘はかなりの確だと思われるが、しかし、堀江氏が《高得点者の一位》をめざして、《比喻ではなく素で》《真剣にゲームをやっている》とするなら、問題は堀江氏ではなく、そのような本当のゲーマーが経済活動の中で《真剣にゲームをやる》ことができ、そしてそれなりの成果を収めることができることにあるのではないか。「理念」なきゲーマーとして市場に入っていけるということは、市場もまた、《真剣にゲームをやっている》「理念」なきゲーマーを受け入れる余地をもってしまっているということではないのか。要するに、市場は自体をゲームセンター化しつつあるということだ。「理念」なきゲーマーにとって《高得点者の一位にな》ることが目標であるなら、その目標のなかでは教養も人とのコミュニケーション能力も必要ではないし、増える一方の所持金で「なんでも買える」ことになるだろう。

この点を見抜いているのは、斎藤環「墜ちた『富豪のニート』」(1. 31付毎日)である。《「ホリエモン」が暴き立てたのは、サイバー化された資本主義空間においては、倫理ではなくルールが要請されるという事実のほうだ。資本主義がITによって徹底されれば、むしろ紙幣が仮想化しディスプレイ上の数値変動のほうがりアルになるような転倒が生ずるという。つまり、仮想空間は資本主義をより純化し、純粋な情報操作だけで価値を生み出すことを可能にするのだ。この空間ではすべてが等価となる。だから彼の「人の心は金で買える」という言葉を、札束で顔を叩くような古いイメージでとらえるのは間違いだ。この言葉は、仮想空間では「金」も「心」も交換可能なものとなる必然性を正しく意味している。》

「理念」なきゲーマーにとっては、《倫理ではなくルール》こそが唯一の道案内であり、重要視されるのは当然である。これらのゲーマーの参入に余地を与える I T 市場という仮想空間を前にして、《「やはり額に汗して働くことこそが素晴らしい」「虚業の I T 市場などうさんくさい」といった〈教訓〉》が、もはやなんの意味ももたないことはいうまでもない。それは、その〈教訓〉があらゆるゲーマーや I T 市場に聞き入れられないからではなく、「額に汗して働くこと」自体がフィクション化してしまっているからだ。《ネット上で投機的な短期取引を繰り返す「デイトレーダー」の急増や、小学生から株取引を教育しようとするような風潮は、嘆いて元に戻るものではない》のである。

斎藤環もまた、「ホリエモン」人気の奇妙な現象について語ろうとする。

《なぜか負け組側と目される「ニート」や「フリーター」の若者たちが、圧倒的勝ち組であるはずのホリエモンを支持し続けたのだ。これは格差化を促進する小泉改革を当の弱者が支持するという構図と平行する。格差社会なる言葉そのものが、あたかも天災のような必然として理解され、背後にある人為性を隠蔽してしまったためもある。このとき負け組にとっては、格差化の進行は単に仲間が増えることを意味するため歓迎される。少しでも上の中間層は怨念の対象になるが、圧倒的な勝ち組は自分とは無関係な存在として、見物や批評の対象でしかないのだ。》

この説明もいまや目新しくはない。だがその先に踏み入ろうとする。《圧倒的勝ち組であるはずのホリエモン》の《およそ勝ち組らしくみえな》さに注目して言う。《彼はまず何よりも、旧世代の価値観の破壊者であり、ぎりぎりのリスク覚悟で無から価値（＝マネー）を創造してみせるトリックスターだった。球団獲得もフジテレビ買収も衆院選も敗れたが、「想定内」というマジックワードで敗者イメージはたくみに隠蔽された。》「ホリエモン」人気を説明するには、ニートな若者たちの心情にどこか触れるホリエモンに踏み入らなくてはならないということだ。圧倒的勝ち組とは《旧世代の価値観の破壊者》としてのそれであり、故に《球団獲得もフジテレビ買収も衆院選も敗れ》つづけ、遂には逮捕されることにまでなってしまった。安定した体制に乗った圧倒的勝ち組ではなかったのである。佐々木俊尚のルポ（『文藝春秋』06. 3）では、次のように取材されている。

《一橋大学－興銀のエリート人脈をフルに活用したライバル、楽天の三木谷浩史とはきわめて対照的である。

だが世間が喝采を送ったのは堀江の方だった。プロ野球参入やニッポン放送株買いしめ事件では、マスコミが三木谷に甘く堀江に批判的な報道を展開したのに対し、インターネット上では堀江を応援する声があふれた。そうした状況は、彼が逮捕されてからも続いた。堀江と親しい会社社長は、強制捜査直後に本人から〈激励のメールが多いんで驚いています〉というメールを受け取っている。

堀江と交友の深い作家は、

「彼は「落ちこぼれのヒーロー」なんだと思う。それが小泉首相と同様、たったひとり

で既成勢力と戦うから喝采を浴びる」

と指摘する。

私は以前、宮内本人に取材した際に彼のこんな言葉を聞いたことがある。

「どうせ僕らは小僧の会社ですからね」

堀江や宮内は道を踏み外さなければ、新時代のヒーローとなっていっただかもしれない。しかし小僧の会社は、結局のところ本物のプロフェッショナル集団にはなれなかった。》

「どうせ僕らは小僧の会社」という宮内氏の口調には、今の企業の仕組みのなかではライブドアはいつまでたっても「大人になりきれない」というニュアンスを漂わせていると同時に、「小僧の会社」のまま勝ち抜くという自負も覗かせていたにちがいない。要するに、「大人の会社」に挑みつづける「小僧の会社」にはニートな若者たちを引き付ける、いってみればニートのな雰囲気や醸成しているところを感じられるのだ。ホリエモンとは「挑戦するニート」ではなかっただろうか。斎藤環は、『「ホリエモン」はまるで「富豪のニート」のようだった』と、次のように説明する。

《労働と勤勉さの価値を否定し（「稼ぐが勝ち」とはそういうことだ）、私生活をブログで公開し、至る所で挑発的言動を繰り返す。しかし、なによりも彼がニートのだったのは、「家族」を否定し続けていたところではなかったか。親にも離婚した妻子にも距離を置き、一貫して独身にとどまり、決して背広とネクタイを着用しないこと。それは自由人たる矜持きやうじというよりは、「勝ち組」の余裕と偽善を身にまとうことを拒否し続ける身振りにみえた。》

「金で何でも買える」「人の心は金で買える」の科白こはくにしても、「金では人の心は買えない」と言うその裏で人は金儲けに勤しみ、金の力で人を動かしつつける欺瞞を突くものであったと考えられる。ニートもまた、『労働と勤勉さの価値を否定し』ていた。ニートが『ニートのだった』ホリエモンを支持し続けたのは道理だとして、その支持が逮捕後も続いている理由については斎藤環は説明していない。ホリエモンの挫折をも超える支持には、どんな理由が潜んでいるのか。東浩紀は『論座』（06．3）のコラムで、『最近のマスコミやウェブを見るかぎり、堀江を団塊ジュニアの代表として捉え、ライブドア事件を世代対決の図式で捉えるのが一般的になっている。実際、ウェブでは堀江擁護の意見が多く見られる。その広がりは大衆的で、ヒルズ族に憧れる上昇志向の若者に限らない。若者の愚かな意見という感じでもない』と記して、若者を尚も魅了し続けるホリエモンへの共感に異を唱える。

《たとえば、堀江より3歳下の経営者、株式会社はてなの近藤淳也は、堀江逮捕の直後のブログで、「僕はファンなんだなあと初めて自覚した」「一番の損失は、それに憧れていた若者の夢の力なんじゃないかと思う」と記している（…）。僕たちは世界を変えられるはずだった、ホリエモンはその象徴だった、それが失敗して悲しい、という抑鬱がここには見られる。堀江は犯罪者どころか、あたかも殉教者のように語られている。

しかし、この共感は誤りであるだけでなく、危険でさえある。そもそも堀江が逮捕さ

れたのは、まさにその「若者の夢の力」を利用して詐欺紛いの行為を行った（と見なされた）からだ。その逮捕を「夢が失われた」と嘆くのでは、「ずっとだましてくれたらよかったのに」と言うのと変わらない。それでは第二、第三のライブドアが出てくる可能性がある。

それにしても不思議なのは、なぜこれほど堀江への共感が強いのか、ということである。堀江の問題ある行動はもともと明らかだし、東京地検が強制捜査に乗り出したのだからよほどのことだ、と考えるのが常識のはずだ。それなのに、なぜ近藤ほどの経営者（「はてな」はたいへんすぐれたブログサービスだ）でさえ、堀江への共感を吐露してしまうのか。

その説明には社会学的観点が必要である。これらの反応は、ライブドアが、若い世代にとって単なる勝ち組企業ではなかったことを意味している。人々は堀江に、成功以上の過剰なものを見てきたのだ。近藤はそれを「夢」と叫んだ。》

東浩紀からすれば、ホリエモン程度の水準にイカれてしまうこと自体が問題なのだ。ずっとだまされつづけることを願っているとしたら思われないのである。《堀江に、成功以上の過剰なものを見て》いるとすれば、《それは、極論すれば、ライブドアの本質が一種のカルトだったということでもある》として、オウム真理教との共通性が論じられる。双方に共通するのは、《「脱社会的」な欲望を抱えた若い世代の受け皿として急成長を遂げた》ことであり、一方は出家によって、他方は億万長者をめざすことによって、《既存の社会体制を超越し》ようとする（ように見える）。「下流」志向の団塊ジュニア以下の世代がホリエモンを支持するのは、彼の行動が正しいわけでも、世代を代弁しているわけでもなく、また彼のような《億万長者に本気では憧れてい》るからでもなく、《自分の夢がもてないかわりに、夢を体現するだれかをつねに必要としているからだ》と言う。

宮台真司は、《10年前に、オウムのような妄想に逃げ込まずに脱社会的な生を肯定すること、彼の言葉で言えば「終わりなき日常」を生きる知恵の重要性を説いた。それにならって言えば、今後の日本社会では、個人投資による一発逆転の夢に捉われることなく、希望格差社会のなかの終わりなき日常をきちんとまったりと生きる知恵が必要なのかもしれない。ホリエモンに夢を託すのは、単に現実逃避だ》と結ぶが、自分の夢が実現できないどころか、そもそも自分の夢すらもてなくなっているのであれば、そのことで自滅することなく、虫のように生きる知恵を身につけよ、ということなのだ。《自分の夢がもてない》ことを欠損にしてはならないし、したがって、欠損が喚び込もうとするものに警戒を怠ってはならないということだろう。

いうまでもないことだが、東浩紀の分析でもみえてこない人々の堀江支持が逮捕後にもかかわらず、《ホリエモンに夢を託す》ほどの熱の帯びかたではない、静かでぼんやりとしたかたちで裾野に広がっているのも無視できない。江川紹子は『アエラ』（06. 2. 13）の文章で、若者だけでなく、《地方の年配の人たちにも、ホリエモン^{びいき}は結構いた。私は、フジテレビ騒動の時期、講演などで出かける先々で、堀江氏とフジテ

レビの日枝会長のどちらを応援するか聞いてみたが、地域を問わず、老若男女のすべての層にわたって、堀江氏支持が多かった》し、逮捕後も、《北関東の山村での中高年を対象にした集まりで、堀江氏の言動が日本社会にプラスの影響を与えたのか、それともマイナスが大きかったかを聞いてみた。「分からない」と答える人が半数以上。その残りの3分の2が「プラス」と回答した》と報告している。

2. 11付朝日朝刊（土曜 be）には調査した be モニターの声として、「親の七光りがなくても、知恵とやる気さえあれば、世の中、やっていけることを若い人に教えてくれた」（熊本、47歳女性）、「もたれ合い、なれ合いの中で、安逸をむさぼってきた既得権層を慌てふためかせた。痛快だった」（兵庫、72歳男性）、「（カネで買えないものはない）の発言に対しても」「建前ばかりで、不況になれば従業員を切り、下請けにしわ寄せする経営者に比べ、よっぽど正直だった」（北海道、40歳女性）、「逮捕されて、『前からうさん臭いと思っていた』などと言われている。世の中をなめた、不作法な若者で終わってどうする」（滋賀、37歳女性）なども取り上げられており、これらの醒めた堀江支持の声にはどこか鬱屈した感情が見出される。『不平等社会日本』の著者佐藤俊樹は、この鬱屈に「ねじれ」を感じて、1. 25付朝日朝刊で次のように分析する。

《「持たざる者の反乱」に見える（…）堀江社長に特別なビジネスの人脈や資産があったわけではない。宮内亮治取締役は貧しい家庭で苦学した人間。いわば「負け組」出身の「勝ち組」候補だ。ライブドアの持つそんなにおいが、憎めなさを作り出した。

加えてライブドアは伝統的な「庶民派のダーティーヒーロー」役でもあった。歌舞伎なら、権力者に大胆不敵に盾突いた小悪党の河内山宗俊。映画でいえば、派手な破壊を繰り返す「ゴジラ」。

不要なのに残り続けているものを破壊する。こうした構造改革路線に賛同する機運が、ライブドアを後押しした。

「ライブドアを決して肯定できないけれど、ライブドアが壊そうとしたものは、もっと肯定できない」。若い世代を中心に、そんなねじれた感情が今も根強くある。

逆に言えば、仮にライブドアが消滅しても、「もっと肯定できない」ものへの否定的な感情は消滅しないのだ。

同様のねじれの構図は、昨秋の総選挙にも見ることができた。「小泉改革を本当に肯定しているわけではないが、小泉改革が崩そうとするものはもっと肯定できない。だから支持する」というものである。

小泉改革とライブドアは、こうしたねじれの構図を最大の武器とする点でこそ、似ている。《「ライブドアを決して肯定できないけれど、ライブドアが壊そうとしたものは、もっと肯定できない」ということは、「肯定できない」部分がライブドアよりも、ライブドアが挑んでいる相手のほうが大きいから、ライブドアを支持するということだ。つまり、ライブドアのほうがまだマシだから、支持するという比較級の原理が働いていたということだ。だがこの支持には、お祭りの熱狂が潜んでいた。東浩紀の言う《ホリエモン

という「夢」であり、《自分の夢がもてないかわりに、夢を体現するだれかをつねに必要としている》という、よくある構図である。要するに、誰かに煽^{あお}られることを待っていた若者たちは、ホリエモンや小泉首相に気持よく煽られようとしたのだ。

《同時に現在、「壊し役」を取り巻く状況は大きく変わりつつある。従来は歌舞伎でも映画でも「普通の人」は観衆でしかなかった。しかし今は、ねじれの構図に乗って、普通の人が舞台に上がってくる。

小泉首相は有権者に直接呼びかける手法で、一部の人だけが参加していた政治に本当に有権者を呼び込んだ。ライブドアも株式市場に多くの個人投資家を呼び込んだ。

だから一度火がつくと、すさまじい破壊力を見せる。東証のシステム停止もその一例だ。

ライブドアは、この「力」の経験を多くの人に教えた。普通の人を面白がらせ、話題づくりに参加させることで、その支持を自らの「力」に変え、フジテレビという既成勢力と渡りあった。小泉改革と同じなのだ。》

以上の佐藤俊樹の分析から汲み取るべきことは、二つある。一つは、《仮にライブドアが消滅しても、「もっと肯定できない」ものへの否定的な感情は消滅しない》という指摘にみられるように、ライブドア支持が問題なのではなく、《「もっと肯定できない」ものへの否定的な感情》が人々の心の奥底に蟠^{はね}りつづけていることこそが問題であるということだ。なぜなら、その《否定的な感情》は比較級的な発想を人々にしいることによって、まだマシに見えるものを強力に肯定するところへと人々を導くからである。その「マシに見えるもの」こそ「もっと肯定できない」もののなかからうみだされていることを見ずに、「マシに見えるもの」はより一層「もっと肯定できない」ものであるかもしれないことへの懐疑的な思考を奪ってしまうのだ。ライブドアを拒絶、排除しようとする既成勢力は「肯定できない」が、同様にライブドア（のようなやり方）も「肯定できない」というようにどうしてならないのか。

もう一つは、抵抗勢力 VS.小泉政権と同様に、経済的、社会的な既成勢力 VS.ライブドアの図式に拮^{から}め取られずに、事態の本質を見抜こうとする意思が人々に薄弱なことである。アレかコレかの二者択一的な図式から解放されて、既成势力的な世界でもなく、それに見一対立しているかのように見えるライブドア的な世界でもなく、アレでもコレでもない、まだ出現していない世界を透視しようとする想像力が貧困なのだ。このことは、対立している既成勢力を抜きにしたライブドア支持者がどれほど存在したか、ライブドアそれ自体の魅力、合理性において、人々をどれほど引き付けたのか、という問題である。「少しだけマシ」なところで溜飲を下げたとしても、我々を覆い尽くしている巨大な鬱屈を一時的に忘れさせるモルヒネ程度の効果しかもちえないだろう。

少なくともホリエモンが乱発している発言のなかに、ライブドアの魅力は全く感じられない。むしろ「おバカさん」しか見出せない。宮崎哲弥と井上トシユキの対談（『諸君！』06. 3）で、ライブドアに社名変更したばかりの04年3月、ホリエモンが「半分ハッタリでしょうが、もう半分では本気」（井上）の調子で、「僕たちはもう何でも買

えるだけのお金を持っているんですよ。買おうと思えば、東京を買えちゃうんですよ」と言ったり、衆院選出馬宣言の前日、「僕は企業社会の中でもうナンバー・ワンになったんですよ。今までメディアに挑戦した人は何人もいたかもしれないけれども、フジテレビに勝ったのは僕一人ですよ」、だから次は政治と言って、「百万人の党員×4千円の会費で、自民党は成り立っているんですよ。だから、40億あったら買えるんです」に、周りが「それはホリエモンによる自民党TOBですね」とヨイショすると、「いいねえ、俺、それをチャッチフレーズにしようかなあ」なんて喜んでた様子を取り上げられている。

そんなホリエモンに対して、「ぜんぜん成長してないじゃん！『金があれば東京が買える』とか吹聴していた頃から（笑）。結局、堀江は政治も、国家権力もわからず仕舞いだった」（宮崎）し、「今回、検察のパワーはわかったと思いますけどね（笑）」（井上）と、ヤレヤレといった調子で話し合われているが、誰の目にも明らかなホリエモンの「無知」がどこからやってくるのか。それは小泉首相と全く同様に、物事の複雑さを捨象して単純化し、短絡的に受けとめるところからやってくることは間違いない。そんな彼らの言動が支持されるのは、世の中がそんな風潮を醸しだしているからだし、「無知」が「無知」を求めて精力的になっているからだ。福田和也は連載『闘う時評』拡大版（『週刊新潮』2・9）で、腹心の宮内亮治などの「飢え」の解りやすさと異なって、《堀江貴文という人物が解りにくいのは、彼の金銭への執着、飢えのようなものが、把みにくいから》だと述べて、彼の子供時代からの短絡的な傾向に目を止める。

《堀江氏は、子供時代をふりかえって、学習塾や柔道、習字などの稽古に通わされたことを「なんか変だな」と思っていたという。「親父は高校を卒業してサラリーマンをしています。それでも貧乏なわけです。それなら『なんでこんな苦しい作業を続けなければならないのか』と僕は疑問に思っていました（『稼ぐが勝ち』）。いくら子供であっても、親が習い事をさせるのが、ただ将来のキャリアや収入のためだけではない、もっと全人格的な配慮からであることは感じるでしょう。けれども親への反発があるので、そういう認識を抑えてしまい、強制的にやらされていることへの不当さだけを拡大して、小理屈をひねる。偉そうにしている割には、親父もたいしたことはないじゃないか、と思う。中学生の時には誰にでもあることですが、世間に出てからもこんなことを自慢げに語るのが堀江という人です。しかも、それがそのまま人生観になってしまう。東大では同級生の親のほとんどが金持ちで、みんな会社経営者だった——そんなこともないと思いますが——と堀江氏はいいます。「要するにお金持ちと貧乏人は生まれたときから立場が違う、ということなのです」（同）。だから、サラリーマンをやめて、起業をなさい、というお説教がはじまる。》

一体、なにが問題なのか。人間の一生を捉える大前提そのものがあまりにも一面的であり、偏向しているのだ。彼は歳を重ねるなかで、その一面性、偏向性を修正することなく、ますます尖鋭化させていったのである。つまり、そんな人生観で生きるのに不都合な社会ではなく、むしろ社会がそんな人生観を助長してくれるように進んでいたのだ。

社会が受け入れてくれそうな寛大さを示していたなら、ホリエモンの「無知」な発言が得意そうに連発されるのは避けられない。福田和也もいくつか取り上げてみせる。

《「ビジネスの世界は競争がものすごく緩いんです。だから60歳でも社長が務まる。アスリートの世界は40代では通用しないでしょ。それほど競争が厳しいんです」(週刊朝日平成16年9/10号)

アスリート、運動選手が40過ぎれば通用しないのは、当たり前です。競技によって多少違いますけれども、30を過ぎると下り坂になるのは仕方ない。それと会社経営をまったく同じものとして語って、何の疑問も抱いていないのです。

こういう発言はいくらもあって、数えあげればきりが無い。「株をやっている人なんて日本の全人口の1%か2%くらいしかいませんから、株をしていれば勝つんですよ」(『100億稼ぐ株成功術』)。なんで、株をやっている人が少ないから「勝つ」のか、まったく解らない。》

《インターネットで世界平和がくる、というなかなか興味深い議論もあります。

「まず、情報によって戦争が終わる。イスラム教国では、自爆テロで死ねば天国で大勢の美女に歓迎されると教えるらしいが、インターネットを見て『よその国は戦争していないし、出会い系サイトなんてあるぞ』とわかれれば馬鹿らしくなるし、誰だって愛する恋人や家族がいれば戦争したくないだろう」(『文藝春秋』1月号)。

これでは、インターネットに触ったばかりの小学生の作文です。実際はまったく逆で、衛星放送やインターネットから流れる映像や情報により、イスラム原理主義者たちは西側の頹廢した文化にたいして強い嫌悪をもち、戦意をかき立てている。スニーカーの靴底の模様が、コーランの文字に似ている、などといって騒動が起るのは、インターネットのためです。》

評判になった昨年公開の『スター・ウォーズ エピソード3 シスの復讐』であまりにも図式的に描かれていたストーリーに触れるまでもなく、「誰だって愛する恋人や家族がいれば戦争したくない」から、戦争をやめるのではなく、「愛する恋人や家族」のためにこそ人々が銃を手にして起ち上がってきたという歴史的事実に「無知」なホリエモンは、喋れば喋るほど馬脚を露し、「おバカ」ぶりを臆面もなく披露するが、《大事なことは、バカなことを云う堀江氏が、本当にバカなのか、ということです。つまり、これが氏の知性の限界なのか、それともなめている、タカをくくっているのか》と、いよいよ問題の核心に迫ろうとする。

《おそらく、世間の水準はこんなものだ、と油断しているのですが、油断というのは怖いもので、段々それが自分の水準になってしまふ。特に堀江氏のように順風満帆で来た人は、我にかえる機会がないので、いよいよタカをくくっているのではないのでしょうか。》

《けれども、世間が甘いだけでは、ここまで浅薄な発言を振りまいたりしないでしょう。むしろ、堀江氏は、きちんと考えることが怖いのではないか。うわつつらな直観をはなれて、きっちり物事を観察し、よく考えるというところから逃げているのではないか。

だから、父上が、一生懸命働いている姿を見て、「貧乏」という結論しか出ない、出そうとしない。そこには貧しいけれども、さまざまな喜びなり、やり甲斐なり、あるいは苦渋に満ちてはいても陰影のある時間があるかも知れない。そういう事柄があるということに堀江氏は気づいてはいるのでしょう。だからこそ、そこから逃げようとし、考えようとししないのです。》

そう、「よく考えない」からこそ、人生のすべてをお金の量で測るのが一番手っ取り早いと単純化することができたのだ。結局のところ、人間の生涯なんて、どれだけお金を稼いだかってことでしょう、というわけである。だから、金儲けにかかわらないことにエネルギーを使うのは、人生の損失だくらいに思っているのだろう。

《よく考えないこと、浅薄な理屈の向こう側にある厚みに目をつぶることが、時代の風潮にあったからこそ、堀江氏はかくも大きな成功を収めたのです。考えない人たちが、考えない堀江氏をもてはやし、また何も考えずにののしっている。今日の日本人は、考えることから逃げて、ナベツネなり、コメンテーターなり、人気ブログなりにまかせてしまっている。

「僕の理想は、『シンプルに』『こだわらず』『考えない』経営です」（『稼ぐが勝ち』）という堀江氏には、「考えない」からこそ、野放図な株取引もできれば、分割もでき、風説を流布しても気にならないし、粉飾についてもあまりこだわらなかった。「ライブドアは、公私がきちんと分けられた透明な会社だと自負しています。この点も『時価総額・世界一』になるには絶対に必要な『掟』です」（『ライブドアの世界一になるキャッシュフロー経営』 宮内亮治との共著）などという文言は、今日から見るとブラック・ジョークにしか見えないけれど、本人はまったく嘘をついているつもりはなかったのではないか。》

おそらく「公私」ということがどういうことであるか、についてよく考えなかったからこそ、自分たちの行っていることがすべて私的な行為の積み重ねのまま、公的な領域に踏み入ってしまったことの問題にも気づかなかったのだろう。「公私がきちんと分けられた」ではなく、ライブドア社長としてホリエモンが振舞う行為がいくら私性に根差していようとも、発現される以上はすべて公共に属しているということについて、彼らはほとんど考えなかったのだ。ライブドア事件とはしたがって、私性が公共圏を犯した事態であったともみなされる。

堀江氏は東京大学文学部宗教学科中退であるが、東大に入る学力を持ちながら彼が「考えない人」であることを怪訝に思うかもしれないが、考えない勉強をしてきたからこそ東大に入ることができた、と掟えたほうが良いような気がする。彼をみていると、考えても得をしたためしがない、というムードがそこには色濃く漂っている。人々はこれまでよく考えた挙句、この程度の社会しか作ってこれなかったのであれば、自分は考えなくてもっとマシな社会を作ってみせるといふ豪語が彼から聞こえてきそうであるが、考える量の少ない社会に耐えられるのは、考える量の少ない人々であることははっきりしている。

2006年2月25日記